

第5回 伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する在り方検討会議会議録

- 【1】 日 時 令和7年5月9日（金）午後2時から4時まで
- 【2】 場 所 伊勢原市役所3階 議会全員協議会室
- 【3】 出席委員 8名（会長及び副会長以外は、委員名簿順）
朝倉会長、前場副会長、本間委員、古住委員、嶋田委員、
吉川委員、飯島委員、菅原委員
- 【4】 欠席委員 2名
- 【5】 出席職員 宮村教育長、熊澤教育部長、今井学校教育担当部長、
立花歴史文化推進担当部長、瀬尾参事兼教育総務課長、
畠山教育総務課施設担当課長、守屋参事兼学校教育課長
田中教育センター所長、青木社会教育課長、
窪田教育総務課係長、林教育総務課主事
- 【6】 傍聴者 0名
- 【7】 内 容
- 1 開会
 - 2 教育長あいさつ
 - 3 議題
 - (1) 令和7年度の検討スケジュールについて【資料1】
 - (2) 前回（第4回）会議の概要について【資料2】
 - (3) 望ましい学校規模・配置の考え方及び基準（案）について【資料3】
 - (4) その他（次回の会議について）
 - 4 閉会
- 【8】 配布資料
- ・ 次第
 - ・ 配布資料一覧
 - ・ 【資料1】 令和7年度の検討スケジュール
 - ・ 【資料2】 第4回伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する在り方検討会議（概要）
 - ・ 【資料3】 望ましい学校規模・配置の考え方及び基準（案）

会議録

【1 開会】

○事務局

定刻になりました。

ただ今から「第5回伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する在り方検討会議」を開催いたします。

本会議は「伊勢原市審議会等の公開に関する要綱」に基づき、原則、会議は公開といたします。

また、後日、会議録を市のホームページで公開させていただきます。あわせて、会議録作成のため、録音させていただきますので、ご理解をお願い申し上げます。

それでは、次第に沿って進行いたします。次第2【教育長あいさつ】です。宮村教育長、よろしくお願いいたします。

【2 教育長あいさつ】

○教育長

皆様、こんにちは。この4月より教育長を務めております宮村進一でございます。本日は、会長をはじめ、委員の皆様にはご多忙の中、お集まりをいただき、誠にありがとうございます。本会議は、昨年度に4回開催し、委員の皆様から貴重なご意見を頂戴いたしました。

前回の第4回会議では、これまでの議論の中間取りまとめを確認するとともに、学校関係者等への教育環境に関するアンケートの結果を報告いたしました。

今年度は全5回の会議を予定していますが、これまでの議論を踏まえ、今年度末に、本市の望ましい学校規模等に関する基本方針を策定いたします。

本日の会議は、基本方針の主眼の一つとなります望ましい学校規模・配置の考え方について、ご意見を頂戴したいと考えております。限られた時間ではございますが、忌憚のないご意見を頂戴したいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

【3 委員あいさつ】

○事務局

新たに本会議の委員に就任いただきました方をご紹介します。

まず、選出区分「地域住民の代表」ですが、自治会連合会会長の大川前委員に代わり前場会長に御就任いただきました。

次に選出区分「中学校長の代表」としまして、須永委員に代わり、新たに櫻井成瀬中学校長に御就任をいただきました。なお、櫻井委員は、本日所要により欠席となっておりますのでご承知おきください。

また、今回は、新年度初回の会議となりますので、改めて委員の皆様から自己紹介をお願いいたします。

【4 副会長の指名】

— 会長の指名により、前場委員を副会長として選任 —

【5 議題】

(1)令和7年度の検討スケジュールについて

○会長

議題の1番目「令和7年度の検討スケジュールについて」事務局より説明をお願いします。

○事務局

まずは、会議における「(仮称)伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する基本方針」骨子(案)の流れについてです。

昨年度は、7月の第1回会議から、昨年1月の第4回会議までに、第1章から第3章部分までを御議論いただき、中間取りまとめとして報告いたしました。

今年度は、基本方針における後半部分に入ります。

本日の第5回会議では、第4章「本市の望ましい学校規模・配置の考え方」について、つづいて、次回(第6回)会議では、第5章「望ましい学校規模・配置に近づけるための方策」と第6章「基本方針策定後の検討に向けて」を議題といたします。

次回の会議で、基本方針における章別の内容は終了することとなり、その後、第7回～第9回までの会議では、基本方針全体の素案から、最終的な基本方針案へ進めてまいりたいと考えております。

つづいて、会議スケジュールとしまして、具体的な会議スケジュールと検討内容です。

本日、令和7年5月9日が第5回目の会議となりまして、次回の第6回会議は6月10日(火)、第7回は7月11日(金)、第8回は10月頃、来年1月頃に第9回目の会議を開催する予定です。説明は以上です。

○会長

昨年度中の合計4回の会議で、伊勢原市の教育がどうなっているのか、学校の人数がどうなっているのかなど数字を見ながら分析していただきました。それを受けて今年度が始まります。他の自治体でも実はこのような委員会を多く行っていますが、それと比べますと、比較的うまくいっているという印象です。

長期的に20年、30年、50年と、長い目でみて、これからどのように伊勢原市の教育のあり方を考えていけばいいのか、そのことは私たちが抱えている問題意識だと思います。そして、今後変化していく社会に合わせて、その準備が必要であるということです。そのため今後5回目以降が会議のポイントになると個人

的には想定しています。

いろいろな意見を皆さん持っていると思いますが、是非その意見を交換できるようにと思っていますので、引き続きよろしく申し上げます。

(2) 前回（第4回）会議の概要について

○会長

つづいて、議題2「前回会議の概要について」事務局より説明をお願いします。

○事務局

令和7年1月24日（金）に開催いたしました第4回会議の概要についてご説明いたします。

前回会議では、昨年度実施しました「教育環境に関するアンケートの実施結果」や「これからの学校像について」が主な会議テーマといたしました。

まず教育環境に関するアンケート結果についてですが、アンケートの回収率や設問の回答数、デジタル教科書への移行状況等について御質問があり、それぞれ、事務局から回答いたしました。

(2) アンケートの設問項目「これからの学校教育で重要だと思うもの」については、一人当たりの回答項目がいくつ程度だったのか御質問をいただきましたが、会議当日に回答出来なかったため、前回の会議後に皆様にご送付させていただきました。

この設問は、選択可能な回答項目数の上限がなかったことから、すべての項目を選んだ人が多いのでは、という趣旨であったかと思いますが、結果では、回答項目を3～5個選んだ方々が全体の半分以上を占めており、10個すべてを選択した方は全体の0.6%、「その他」の選択肢を除くとすると、9個を選択した方々が8.8%でした。

つづいて、小中一貫教育の検討の進め方や今年度実施を計画している市民説明会の実施方法などについて御質問をいただきました。

つづいて、委員の皆様からいただきました「主な意見」について「これからの学校教育で重要だと思うもの」という設問では、主に4点のご意見を頂戴し、学校と地域の連携意識や1学級当たりの望ましい人数について、デジタル教育の在り方、少人数教育による効果的学習についてなど、基本方針を検討するうえで、重要なご意見を頂戴いたしました。

また、「望ましい通学時間を越えた場合の配慮」では、スクールバスの検討について、「これからの学校施設で重要だと思う機能」については、防災・防犯機能の強化や通学環境の整備、学校施設のバリアフリー化、地域施設としての在り方についてご意見を頂戴しました。

そして、自由記述でご回答いただいた「これからの学校の在り方」については、先端技術の導入など新しい技術の導入が求められている一方で、デジタルとアナログ、どちらも、方法論に偏るのではなく、教育の目的を重視し、選択の幅が広がる

ことが重要性である、というご意見を頂戴いたしました。

どのご意見も、基本方針策定における非常に重要な視点であったと思いますので、本市の望ましい学校規模・配置の考え方や望ましい学校規模等へ近づけるための推進方策の検討において、十分に参考とさせていただきたいと思います。

○委員

デジタル教科書の話が出ていたかと思います。紙の教科書は、紙の教科書で良いところがあり、必ずしも時代遅れでないと思っています。デジタル教科書については、場面によって、効果的であるとも思っています。

小中一貫についても議論があったと思います。今まで小中一貫教育というと、私立の中高一貫教育が思い出されますが、ここ7、8年で様々な自治体で、小学校と中学校を新しく一つの敷地に義務教育学校として作るのが効率的ではないか、という意見もあります。小中一貫は、伊勢原市だけではなく、先行して行っている自治体もあります。その場合、カリキュラムの作り方が難しくなるという話も出ていたかと思います。確かにその通りではあります。小中一貫教育の問題点は、実はインターネットで出ていますので、この部分をもっと知りたい方は、そういった資料を検索することができるようです。

1学級当たりの望ましい人数については、より少ない方が良いとの回答が出てきていて、この時に、クラス数の人数の問題について議論に入ったかと思います。小学校35人、中学校40人では多いのではないかということです。

それと個人的にはとても気にしていることですが、望ましい通学時間を越えた場合の配慮についてです。一部の学校でバス通学しているということでした。アンケートの回答では、今後、学校数が減ることになれば、スクールバスの運用も必要になるとの回答も多くあり、これをみたとき比較的安心しました。現状では公共交通機関を使って通学時間が長い子どもには対応できていて、これからも公共交通機関を使った形での対応ができそうだというふうに思いました。

(3)望ましい学校規模・配置の考え方及び基準（案）について

○会長

つづいて、議題の3番目「望ましい学校規模・配置の考え方及び基準（案）について」事務局より説明をお願いします。

○事務局

議題(3)望ましい学校規模・配置の考え方及び基準(案)についてご説明いたします。まずは、本市の「望ましい学校規模(学級数)について」です。

国は、1学校当たりの標準的な学級数を「12学級以上、18学級以下」としております。

これを1学年あたり、つまり6学年で割りますと、1学年あたりの学級数は、2学級以上・3学級以下が標準規模となります。

ただし、国もこれは、あくまで目安としており、文部科学省の手引きにおいて、地域の実情に応じた分析を行い、各市町村が主体的に検討することとしております。

国と同基準としている小学校は、大和市と小田原市ですが、傾向としては、12～24学級としている市が最も多く、18～24学級と国と全く異なる基準を採用しているのは、相模原市と、座間市となっています。

つづいて、中学校ですが、国と同基準としているのは、大和市と座間市で、それ以外の市については、各市、地域の実情に応じて、異なる基準を採用しております。

各市、基準を定めるにあたり、地域の実情に応じた、標準的な学校規模の基準を定めております。

つづいて、本市の望ましい学校規模を検討するにあたり前提となる、1学級当たりの人数について、ご説明いたします。

現在、公立小中学校の学級編成は、法律で示されている学級編成を基準とし、都道府県の教育委員会が定めることとされておりますが、現在、神奈川県は、法律と同一基準となっております。

1学級の児童数は35人とされており、令和3年度から令和7年度までに段階的に35人学級への移行を進めています。

中学校については、現在、1学級あたりの生徒数を40人としておりますが、昨年12月、政府から、中学校の1学級あたりの生徒数を35人とする方針が示され、来年度から3カ年かけて、順次、中学校の全学年を35人学級とする発表がなされております。

つづいて、国の基準に基づく児童生徒数及び学級数の推移ですが、昨年度の推計時点では、中学校の1学級あたりの人数を40人で学級数の推計をしておりました。

中学校35人学級とする政府発表を踏まえ、改めて、中学校の1学級あたりの人数を35人とし、学級数を推計しました。

この結果、現在から10年後の中学校の学級数は、4中学校すべての学校で、1学級から最大3学級、学級数が増加いたします。

つづいて、10年後から20年後においても、35人学級とした場合、各中学校の学級数は増加する見込みとなっております。

市の望ましい学校規模の基準を検討するにあたっては、小学校と同様、中学校についても35人学級を前提条件として検討を行う必要があると考えております。

つづいて、大規模校・小規模校のメリット・デメリットです。文部科学省では、小中学校の適正規模・適正配置等に関して、標準の規模以上の学校と、それより小さい規模の学校におけるメリット・デメリットを整理しており、それぞれ、標準的な学校規模へ近づけることの必要性を示しております。

標準規模より大きい学校では、学習面では、他者との比較で生まれる学習意欲の向上やグループ学習、クラブ活動などの集団活動における学習面の活性化といったメリットが示される一方で、一人一人の活躍の場が少ないことや児童一人当たりの校舎や運動場等の施設面積が狭くなることで教育活動の展開の難しさがデメリットとして挙げられます。

また、生活面では多様な意見に触れる機会が得やすい一方で、異学年交流の機会設

定の難しさが挙げられ、学校運営面では教職員間での協力意識の高まりやクラス替えが実施しやすい一方で、児童生徒一人一人へのきめ細かな指導の難しさや教室の不足などがデメリットとして挙げられています。

つづいて、標準規模より小さい学校のメリット・デメリットですが、学習面では「きめ細かな指導」や「異学年交流」、学校運営面では「施設を余裕を持って使える」といったメリットがあります。

一方、デメリットとして、学習面では、グループ学習やクラブ活動、部活動の選択の幅が限定される、生活面では、児童生徒の人間関係や相互の評価が固定しやすい、学校運営面では、クラス替えが出来なくなる、またその他としてPTA活動における保護者の負担が大きいといったデメリットが挙げられます。

小規模校における主なデメリットは、昨年度実施しました本市の教育環境に関するアンケートにおいても、本市小中学校の教職員に対して質問しましたが、この表と同様に、デメリットとして回答した割合が多い項目となっておりました。

文科省は、学校規模の適正化に関する基本的な考え方として、一定規模の児童生徒集団の確保や、バランスのとれた教職員集団の配置により、一定の学校規模を確保することが重要であるとしています。

つづいて、「伊勢原市立小中学校の教育環境に関するアンケート」結果における保護者や教職員、学校運営協議会、児童生徒が考える1学年あたりの望ましい学級数や、1学級あたりの望ましい人数についてですが、「小学校」の回答結果では、各対象の9割以上が「2～4学級」が望ましいと回答しており、「中学校」では子ども以外の対象では、7割以上が「3～6学級」、特に教職員では9割以上が「3～6学級」と回答しております。

1学級当たりの人数についてですが、小学校・中学校ともに、現状の35人以下と回答する割合が多く、各対象で現状よりも少ない人数が1学級当たりの人数として望ましいと回答した割合が多くなっております。

これまでの内容を踏まえまして、本市の望ましい学校規模(学級数)の考え方を整理したいと思います。

まず、基本的な考え方を整理いたします。

1点目、望ましい学校規模については、文科省の考え方を踏まえ、学級数(通常学級の数)で定めます。

2点目、その範囲を定めるにあたり、小・中学校における1学級当たりの人数は、国・県の基準に準じて35人を前提に考えます。

3点目、ただし、1学級当たりの人数は、今後の国の制度改正や少人数学級推進に係る取組の進捗に合わせて、随時、見直しが必要であるとともに、見直しの際には、インクルーシブ教育推進に伴う学級数への影響にも留意します。

そして、4点目、学校規模の基準は学級数で定めますが、今後、望ましい学校規模を実現するための推進方策を検討する際には、1学級当たりの「児童・生徒数」にも着目して検討を行います。

つづいて、望ましい学校規模(学校数)の基準案です。

基本的な考え方や県内他市の基準、将来推計に基づく学級数の推移、教育環境に関するアンケートの結果等を踏まえ、本市の望ましい学校規模の基準案について、次のとおり定めたいと考えます。

小学校については、1学年当たりの学級数を2学級から4学級と考え、学校当たりの規模としては、12学級から24学級を望ましい学校規模の基準とします。

中学校については、1学年当たりの学級数を3学級から6学級と考え、学校当たりの規模としては、9学級から18学級を望ましい学校規模の基準としたいと考えます。

この基準を設定することで、現在、そして20年後の小学校では、望ましい学校規模より小さい規模となるのが大山小学校、中学校では、伊勢原中学校が望ましい規模よりも大きい学校となります。

そして、20年後の令和26年度の推計では、小学校は、大山小学校、高部屋小学校、緑台小学校が望ましい学校規模より小さい学校となり、中学校では、すべての中学校が望ましい学校規模の範囲内となります。

つづきまして、望ましい学校の配置(通学距離・通学時間)についてです。

学校規模(学級数)と同様に、通学距離と通学時間についても、国の考え方が示されております。

まず「通学距離」についてです。小学校では「おおむね4km以内、中学校ではおおむね6km以内」を基準としております。

つづいて、「通学時間」ですが、「おおむね1時間以内」を一応の目安としていますが、地域の実情や児童生徒の実態に応じて判断を行うことが適当とされ、県内各市では、地域の実情に応じた基準が設定されております。

それでは、本市の通学時間について、改めて現状をご確認いただきたいと思います。

市内の小・中学校全ての学校で、国の基準である小学校4km、中学校6kmの範囲におさまっており、最も遠い通学距離が遠い学校は、小学校では高部屋小学校の約3.4km、中学校では山王中学校の約5.3kmとなっています。

つづいて、通学時間の現状です。昨年度実施しました教育環境に関するアンケートにおいて、現状の通学時間と望ましい通学時間を御回答いただいておりますが、現状、小・中学校ともに、ほぼ全員が60分未満と回答しています。

また、望ましい通学時間についてですが、現状の通学時間と同様、対象の9割以上が60分未満と回答しており、現状の通学時間と望ましいと考える通学時間は概ね一致していると言えます。

これまでの内容を踏まえまして、本市の望ましい学校配置(通学距離・通学時間)の考え方をまとめたいと思います。

まず、基本的な考え方ですが、文科省の考え方を踏まえ「通学距離」と「通学に要する時間」で望ましい学校配置を定めます。

つづいて、望ましい学校配置の基準についてです。望ましい学校配置に係る基本的な考え方や、現状の通学距離やアンケート結果に基づく通学時間に関する結果等を考慮し、本市の望ましい学校配置の基準を次のとおり定めたいと思います。

小学校については、望ましい通学距離を概ね4km、通学時間を60分以内とします。この際の主な通学手段は、徒歩等とします。

中学校については、望ましい通学距離を概ね6km、通学時間を60分以内とし、この際の主な通学手段は、徒歩または自転車等とします。

資料の説明は以上となります。

○委員

これまでのデータを参照すると、人数が減少し、統廃合が必要なのかと想像していたら、意外と大丈夫でないかと思われました。

小規模校のメリット・デメリットにおける、PTA活動ですが、PTAも時代に合わせた形で見直していこうという流れがあり、これまでの従来通りの活動でなく、先生の働き方改革が進められているように、時代に合わせた形で進めたいと思っています。メリット・デメリットが少し変わってきているという印象を持っています。

○委員

他市の学校規模の基準ですが、我々のように学校規模が設定されていない市はありますか。

○事務局

近隣市で、平塚市、秦野市は公開されていないため、設定されていないと思われます。

○委員

学校は、開かれた学校という流れの中で、これからは、地域と学校を組み合わせで考えていかなければならないと思っています。

○会長

学校の規模については、先生方にとってかなり大きな問題であると思いますが、教育を受ける側からすると、それほど学校の規模が大きいとか少ないとかは問題があると思っていないところがあります。むしろ気になるのは1学級当たりの人数だと思っています。過去から現在、現在から10年後、10年後から20年後と学級数の変化について、どのような印象を持ちましたでしょうか。

○委員

日本全体の流れを考えると、時代の流れに合っているなという印象です。現在から10年後において、児童生徒数の減少が目立つという印象です。一方で、10年後から20年後は、児童生徒数が増加見込みであるのが意外でした。子どもが今後も

増えていくと、クラスの人数も増やすことができ、いろいろな交流を増やすことができると思いました。

このページから離れてしまいますが、アンケート結果から見ると、中学校の1学級当たりの望ましい人数については、子どもの回答が35人や36人以上の回答が49.5%と割合が高く、面白いと思いました。体育祭や文化祭を考えると、人数が多いほうが楽しいと思うのは当たり前だなどと思いましたが、中学校は現在40人学級ということなので、40人程度の学級が理想と答える学生が多かったと思いました。やはり、子どもは、たくさんの人との出会い、交流があるほうがすごく学校生活は楽しくなると思いますし、人間としても成長できると思います。そういうような交流が今後も実現できるようになるといいと思いました。

○委員

アンケート結果をみると、“クラスに友達が数多くいる方がよいという回答をしている子が半分。残りの半分は先生たちと同じ学級数を選んでいる”結果になっています。

子どもたちには、一学級の人数について少なくなることが問題だという意識は、それほどないようだ。生まれてくる子どもの数も少しずつ減っていることから、一クラスの児童・生徒数が少なくなるとは、受け入れやすいのだろうと想像しました。

これが大学の状況になると大変になります。中学と高校は、簡単に生徒の定員数を増やすことはできません。一方で例えば、東大が新しい学部を作るとか、早稲田が一つの学部の定員を増やすとかは比較的簡単にできます。大学は過当競争がすごいです。

昨年度の会議資料を拝見すると、伊勢原市の教育は、これから大変だから、すぐに統廃合が必要だとか、そういう慌てる現状にはないと思っています。

○委員

国が35人学級を中学校で2026年から段階的に進めていくということで、小規模校が標準規模に変わっています。ということは、この先、学校の先生方を中心として、1学級当たりの人数としては35人を上限として、小学校の場合、21人から25人とか、中学校の場合、20人とか30人とかで授業を行っていく方が多いと考えられます。この先、小規模化が進み、30人学級、25人学級になっていくことも考えられます。国としてはどういうふうに考えているのか、説明してくれるといいなと考えています。

メリット・デメリットについては、小規模校のメリットにもありますように、自分の意見が採用される機会がとて多くなっていると思います。例えば行事や修学旅行などで、自分事として主体的に参加していることが多いと思います。

男女比に偏りが出やすいというデメリットがありますけれども、一方で異性同士の自然な交流ができているという印象です。

人間関係については、メリット・デメリットの裏腹になりますが、先生とは親子、同級生や下級生とは姉妹のような関係ができることもあります。逆に親密過ぎるとフォーマル、インフォーマルな対応が区別できなくなります。

教育指導上、課題のある子どもを受け入れることがあります。一方でリーダーシップを取った子がいれば、その子の影響力によって引っ張られることがあります。つまり一人ひとりの影響力が非常に強いです。

1学級当たりの人数については、子どもは大人数の方が良いとわかりますが、小人数の静かな環境の方も好む子もいると思います。そういう子どもは、不登校になってしまうこともあります。アンケート結果には、そのような意見が反映されているのでしょうか。

もう一つは、小規模特認校である大山小学校ですが、比々多小学校と交流があるようですが、その辺の実態を教えてください。

○事務局

アンケート調査の対象として不登校の子どもが入っているかどうかについてですが、学校でアンケートを実施する際、不登校の子どもは、学校に来たり来なかったり、というような子もいるため、回答する機会があったかなかったかというところまでは把握していません。

大山小学校と比々多小学校の交流については、正確な回数まで把握はできていませんが、交流が行われています。

○委員

比々多小、高部屋小、大山小の5年生が山王中の体育館に集まり、ゲームやレクリエーションを行ったりして、小学校から中学校への進学の際に、スムーズになるような取組が行われています。

○委員

1クラス何人が良いかについて。子どもたちはどう思っているのか、というのは、これはしっかり見なければいけない数字だと思いますが、個人的にはそれ以上に先生方がどう思っているのかも大事な視点だと思います。本音でいうと21人か25人が良く、その程度でないとクラス運営が難しいということでしょうか。

○委員

1クラスの人数が少なければ少ないほど、子どもたちに目を配ったりできます。少なければ少ないほど、手厚く一人にかける時間をたくさん取ることができると想像します。現在、子どもたちに先生が目をかける時間を確保できるように、いろい

ろな工夫や教員の働き方改革をしています。学級数の人数が減るということは、先生たちの子どもたちに関わる時間が増えていくと思います。

一方で、教室不足がすごく気になってきます。現時点において特別支援学級に対する保護者の意識がものすごく高くなっていて、特別支援学級も年々各学校で増えているような状況です。特別支援学級へのニーズということを踏まえると、教室不足の問題もあるかなと思います。

○委員

外国では15人を1学級とする事例もありますが、学校の教育目標に子どもの社会性は考えられていいように思います。そう考えると25人は必要かなと思います。

○事務局

この会議としての1学級あたりの人数は定められないため、委員の皆様からいただいた意見については、教育委員会として考える必要があると思います。

また、教員の数やその経費等と考えると簡単に25人学級にするのは市独自でやるのは難しいと思いますが、教室数の問題など、いろいろな条件が絡んでくると思いますが、先生方の意見は聞いていきたいと思います。

○委員

この会議としては、1学級当たりの人数に対する先生たちの声は教育委員会の中でしっかりと認識して、今後の教育行政を推進していただきたいと思います。

また、委員からは、学級数の人数が25人でいいのではないかという声も挙がっています。一方で、特別支援の子どもは増えてきているので、そういった部屋を確保することを現実的に考えると、25人だと空き教室がなくなるので、30人の上限ぐらいがいいのではないかと、そういう考え方もあります。個々の学校の状況を踏まえた対応ができるように一学級の定員数については、幅を持たせてもいいと思います。

○会長

学級数の件でも結構ですし、通学時間、通学距離についてもご意見をお聞かせください。

○委員

教職員の人数が少ない理由で、非常勤が増えていきます。本来は一人の子どもに一人の先生よりは、何人かの先生で子どもの面倒をみられたらよいと思っています。子どもには、この教科ができなくてもここは優れているよってという先生がいたら良いなと思いました。そんな先生がいることで子どもの自信につながると思います。私が子どものころの先生はそうに言ってくれました。

○事務局

そういう意見はありがたいと思います。伊勢原市は、国より早く小学校1年生は35人学級を行っています。県から配置される教員の数は決められていまして、独自に教員を採用、配置というのはいけません。そのため、非常勤講師として入れています。委員の御意見ですと、学校教育の在り方、一人の子どもを多角的な視点でいろいろな教員が関わっていくというやり方になると思います。仕組み的なところで言えば、いわゆる学級担任制、一組の担任は誰、二組の担任は誰ではなくて、その学年をチームとして、常に1組に入る先生が入れ替わって指導することで、それなりの効果を得ているところもあります。規模や人数の見直しといった、そういう教員と子どもとの関わり方の仕組み、やり方についても、これはこの議論の場ではないと思いますし、十分実現可能なお話をいただいたな、というふうに思っています。

○委員

通学についてですが、近所に三本松交差点があります。その近くには東海大学の職員寮があります。学校へはここから2キロ半ぐらい歩いて通学しなければなりません。その人数が大体100人程度だと思います。特殊な交差点になっていて、いくつか横断歩道を渡らないと通行することができない危険な交差点になっています。

もう一つは、学校に近づけば近づくほど過疎地であって、子どもたちがいない。だから、だんだん見守り隊が減っていってしまう状況になっています。東名高速の先の地域からだんだん人が減っていき、見守り隊が減ってしまう。当然住人の数が違いますが、大事なことは見守り隊の確保だと思います。

学校の規模については、東名高速の地域の人が増えれば、高部屋小ではなく伊勢原小がパンクしてしまうとかあるのでしょうか。理想的に言えば、学区が調整できれば良いと思っています。

通学路については、そういった危険性を配慮していただければと思います。

○委員

今後は学校環境の考え方、特に高部屋小のところは重点的に考えなければならぬと思います。

通学時間、それから通学時の安全の問題です。個人的には小学校4km以内は賛成できません。小学6年生ならともかく、小学1年生が1時間かけて通学するのは考えられません。この基準についても学年によって変えていく方が良いと思います。

○委員

高部屋の子どもは、東名高速より南側から通う子が多いという話を聞いています。高部屋小学校はエリアを分けると人口の偏りがあると思います。他の地域も

あると思いますが、高部屋小学校は、小学校区がとても広い。ニーズが多いのは南の方だと思っていましたが、地域の人口がアンバランスだと思っています。

○事務局

ご指摘の通り、全部基準に当てはまっているから、何も考える必要はないというのではなく、委員の意見を踏まえて、基準は基準としてあるけれども、今後より望ましい教育環境に向けた検討すべき事項として、例えば具体的には学区の見直しとか、そういったことも対策としてはあり得ると思います。ただその学区の見直しというのも、安全面の視点からというのもあれば、地区のつながりとか、そういった部分で単純に変えることができない地区もあるので、十分な検討と議論が必要だと思います。今の委員の意見を受け、対応策の一つとして検討していかなくتهはいけないと思いました。

○委員

会議の主目的から離れますが、ソフト面についてです。これは目的としては先生方の働き方につながるとなっています。授業に関する研究組織なり、委員会を伊勢原市でも持つというのはどうでしょうか。例えば、大きな話題になっているのは埼玉県の前橋市が最初だったと思いますが、リーディングスキルテストというのを実施しています。これは国立情報学研究所の新井紀子氏が主導していたもので、読解力とはちょっと違い、単純な指示書とか取扱説明書とか、教科書などに書いてある日本語をそのまま情報を間違えずに拾えるようなそういう力を試すテストです。これを行うことによって学力が上がったり、あるいは教室が落ち着いたりとか、そういうことが出てきています。例えば今こういう教育方法が検討されていて、それを伊勢原市に使えるのか、というのを、それぞれの学校の代表の委員の方とかに負担のない範囲でシェアをしながら、伊勢原市の学校の先生と、教育委員会がメンバーに加わって授業研究する組織あったらいいなと思っています。

○事務局

現在、教育委員会の取組として、指導主事を中心に教育センターで行っています。もともとは研究することが本来の目的でありますので、ぜひそういうところに注意をしていきたいと思っています。

○委員

比々多小学校で、若手3、4年目くらいの先生と話す機会があり、聞いた話では、自分がどこかに研修に行って、何か面白い指導方法とか、そういう話を聞いてきたから、それを仲間たちに伝える場を作って、お互い話しあっていると聞きました。自主的にみんなでやれることがとても良いと思いました。

○委員

業種は違いますが、社会人4年目の若手社員がネットワークの最新の研究について調べて、ワークショップを開いたりすることがあったりしますので、そういった自主的な活動というのはどの業界でも取り組まれていると思います。一方でやはり若手目線で課題だと思ふことは、そういった活動は自主的な活動にとどまってしまうことです。社内の仕組みとして自主的に動いた人が1年間の最後で評価されるような制度に会社の中でなっていないところが、もったいないと思っています。自主的に頑張った人がきちんと評価されるような制度ができていれば、これからポジティブな先生方も増えるかなと思いましたし、そういうふうになっていくのが理想的と思います。

○事務局

民間の会社の人事評価などは、我々の人事評価と少し違った部分もありますが、流れとしてはまさにそこが大事だと思います。

○会長

会議は来月、再来月と続いていきます。基本的には、学校の適正規模・適正配置は報告するのが前提ですが、先ほど話であったように、今後伊勢原市の教育をどのようにしていくかという観点から、いろいろ提案ができました。ぜひ次回以降もこういった部分も含めてご提案いただきたいと思います。

○事務局

次回の会議につきましては、6月10日の火曜日の午後2時から予定となっております。場所は本日と同じ場所です。よろしく申し上げます。

以上をもちまして、第5回会議を終了します。ありがとうございました。